速報

第20回「小学館ノンフィクション大賞」最終選考結果のお知らせ

大賞

『トリソミー ～産まれる前から短命と定まった子』
松永正訓（まつなが・ただし）

優秀賞

『朝鮮の海へ ―日本特別掃海隊の軌跡―』
城内康伸（しろうち・やすのぶ）

『シロアリ 復興予算を食った人たち』
福場ひとみ（ふくば・ひとみ）

小学館は本日、『週刊ポスト』『女性セブン』『SAPIO』3誌主催による「第20回小学館ノンフィクション大賞」の最終選考会（午後5時から、山の上ホテル）を行い、受賞作を決定いたしました。

今回は大賞に松永正訓『トリソミー ～産まれる前から短命と定まった子』、優秀賞に城内康伸『朝鮮の海へ ―日本特別掃海隊の軌跡―』、福場ひとみ『シロアリ 復興予算を食った人たち』を選考しました。

大賞受賞者には賞金として500万円が、優秀賞受賞者には100万円が贈られます。

第20回「小学館ノンフィクション大賞」最終選考結果のお知らせ

主催　（株）小学館　週刊ポスト／女性セブン／SAPIO

大賞

『トリソミー ～産まれる前から短命と定まった子』

松永正訓（まつなが・ただし）51歳

【プロフィール】

1961年12月10日、東京都生まれ。千葉大学医学部を卒業し、小児外科医となる。小児がんの分子生物学的研究にて医学博士号を修得。外科的先天異常と小児がんが専門。現在、「松永クリニック小児科・小児外科」院長。著書に『命のカレンダー 小児固形がんと闘う』（講談社）など。

【梗概】

ある日、私のクリニックに一本の電話がかかってくる。生後七カ月の赤ちゃん、朝陽君の主治医になって欲しいという総合病院からの依頼だった。朝陽君は目も見えず、耳も聞こえず、ミルクを口にすることもできない。自宅ではいつ呼吸が停まるかわからない。朝陽君の多発奇形は、第13番染色体が三本に増えている13トリソミーという致死的染色体異常によるものだった。

両親はいったいどういう気持ちで朝陽君を受け入れ、自宅へ連れて帰ろうと思ったのだろうか。私は、朝陽君のような弱い命を通じてこそ、今という時代が示す命の形が見えるのではないかと考えた。

私は主治医を引き受け、自宅を訪問して家族との交流を持つようになっていった。両親は当初から朝陽君を受け入れ、祖父母を交えて分厚い体制で朝陽君の介護をおこなっていた。脳が低形成であるため、朝陽君は完全な寝たきり状態であると私は予測していた。ところが朝陽君は、動作が少しずつ大きくなり、笑顔も見せるように成長していった。

産まれた直後に亡くなった18トリソミーの赤ちゃんの母親や、自宅で人工呼吸器を付けている寝たきりの子どもの母親に話を聞くうちに、幸福の形は家族によってさまざまであることがわかってきた。我が子の障害を簡単に受け入れられる親はいないが、子どもを愛しく思う気持ちは障害の有無に関係がない。そして、どの母親たちも「出生前診断」という方法で「劣る」と烙印を押された生命を安易に摘み取ることに反対していた。

朝陽君は二歳の誕生日を迎えた。産まれる前から短命と定まっている朝陽君の命が、あとどのくらい残っているのか誰にもわからない。しかし、毎日を精一杯生き抜くことが、朝陽君にとっての幸せの形だと母親は誇らしげに語る。

第20回「小学館ノンフィクション大賞」最終選考結果のお知らせ

主催　（株）小学館　週刊ポスト／女性セブン／SAPIO

優秀賞

『朝鮮の海へ —日本特別掃海隊の軌跡—』

城内康伸（しろうち・やすのぶ）50歳

【プロフィール】

1962年11月15日、京都市生まれ。早稲田大学法学部卒。1987年、中日新聞入社。1993～1996年、2000～2003年、ソウル特派員、同支局長。その後、北京特派員などを経て、再びソウル支局長に。2011年11月、帰国。現在、外報部デスク。著書に『猛牛と呼ばれた男—「東声会」町井久之の戦後史—』など。

【梗概】

本稿は一九五〇（昭和二十五）年六月に北朝鮮による韓国への侵攻で勃発した朝鮮戦争に伴って、北朝鮮軍が敷設した機雷を除去するため、朝鮮半島沖に出動した海上保安庁所属の「日本特別掃海隊」の軌跡を描いたものである。掃海作業には、旧海軍軍人を中心とする約一千二百人の掃海隊員と掃海艇など四十七隻の船舶が従事した。

一九五〇年十月二日、米極東海軍司令部米極東海軍司令部参謀副長のアーレイ・バーク少将は海上保安庁の大久保武雄長官に、同庁所属の掃海部隊を朝鮮戦争の渦中にある朝鮮半島沖に派遣するよう要請した。日本各地で掃海作業に従事していた掃海隊は緊急電報で、下関に集結。具体的な目的地も知らされぬまま、朝鮮半島東岸の元山、西岸の鎮南浦（現・南浦）、海州、仁川、群山に出動した。うち、元山、鎮南浦、海州は南北を分かつ三十八度線の北方、北朝鮮の海域である。元山では、掃海艇の一隻が機雷に接触して沈没、死者一人、十八人が負傷した。残る三隻の掃海艇は作業の続行を拒否し、日本に帰国。GHQの激しい怒りを買い、指揮官や艇長は職を去った。 中国軍の参戦により、中朝国境まで進撃していた国連軍が敗走するのに伴って、特別掃海隊の約二カ月にわたる掃海任務は十二月初旬に終了した。この間、三百二十七キロメートルの水道と六百七キロ平方メートルの泊地を掃海し、機雷二十七個を処分する成果を上げた。日本掃海隊の活動は翌一九五一年九月に調印されたサンフランシスコ講和条約の締結に好影響を及ぼしたとされる。

筆者は、何もしらされず現場に赴くことになった隊員たちの本心や、彼らが掃海期間中に遭遇したさまざまな出来事に焦点を当てたいと考え、高齢者となった元隊員の生の声をできるだけ多く救う作業にとりかかった。

第20回「小学館ノンフィクション大賞」最終選考結果のお知らせ

主催　（株）小学館　週刊ポスト／女性セブン／SAPIO

優秀賞

『シロアリ 復興予算を食った人たち』

福場ひとみ（ふくば・ひとみ）37歳

【プロフィール】

1976年5月23日、広島県生まれ。同志社大学法学部政治学科卒業、同志社大学大学院総合政策科学研究科博士前期課程（修士）修了。政策シンクタンク「構想日本」の政策スタッフ、経済誌『フィナンシャルジャパン』の編集者などを経て、現在は週刊誌『週刊ポスト』の取材記者を務める。

【梗概】

東日本大震災という未曾有の災害からの「復興」という名目で、政府は19兆円にも及ぶ「復興予算」を組んだ。ところが震災から1年以上が経過した2012年中頃、その復興予算の大半が、被災地とは「無関係」の事業に使われていることが明らかになった。霞が関の合同庁舎、中央官僚の人件費、捕鯨のシーシェパード対策に次世代原子力の核融合計画まで、目を疑うような「予算の流用」が、霞が関の主導で公然と行われていた。

本書は、その流用の事実を報じた『週刊ポスト』2012年8月10日号の筆者記事をもとに、流用の実態とその後の経過、そしてそれを生み出した官僚たちの性質を明らかにしたものである。もう一つの視点は、なぜこれほどの大問題がそれまで見逃されていたのか、という問題である。この問題が起きた背景には、与野党の政治家たちが官僚に取り込まれ、流用のスキーム作りに加担したこと、また本来、予算の使い道を厳しく監視するはずの新聞をはじめとする大メディアが見て見ぬふりを決め込んだことなど、複合的な要因があった。その点で復興予算の流用問題は、官僚、政治家、メディアという、この国を動かす中心となったプレイヤーたちの問題点を、期せずして明らかにしたものだったといえる。

流用はなぜ、どのようにして起きたのか――その全過程を辿ることで、「日本というシステム」の構造的欠陥を明らかにする。

【第20回「小学館ノンフィクション大賞」について】

20回目を数える今回は、本年4月末日に募集を締め切り、200作品を超える力作が寄せられました。この中から次の6作が、本日午後5時から山の上ホテルで開かれた最終選考にかけられ、椎名 誠、関川夏央、髙山文彦、二宮清純、平松洋子の各選考委員により受賞作が決定いたしました。

【最終候補作】

■『アフガニスタン戦記 ～対テロ戦争の「現場」を追い続けて』
横田徹

■『トリソミー ～産まれる前から短命と定まった子』
松永正訓

■『外国人犯罪捜査』
岡村美奈

■『朝鮮の海へ ―日本特別掃海隊の軌跡―』
城内康伸

■『シロアリ 復興予算を食った人たち』
福場ひとみ

■『白菊 ――日本の花火を変えた男・嘉瀬誠次の九十一年――』
山崎まゆみ

●賞金：大賞=500万円（複数受賞の場合は分割） 優秀賞=100万円
●発表：受賞作は8月中旬発売の『週刊ポスト』『女性セブン』『SAPIO』誌上、および小社ホームページで発表いたします。受賞作は単行本として刊行予定です。
●選考委員：椎名 誠（作家）、関川夏央（作家）、髙山文彦（作家）、二宮清純（ジャーナリスト）、平松洋子（エッセイスト）

【小学館ノンフィクション大賞】

「小学館ノンフィクション大賞」は、1993年、創刊25周年を迎えた『週刊ポスト』が『SAPIO』とともに、21世紀へ向け新しい感覚で時代を切り拓いていく新進気鋭のライターの登龍門となるべく、「21世紀国際ノンフィクション大賞」として新設、第7回より「小学館ノンフィクション大賞」と改称したものです。受賞作は『狂気の左サイドバック』（第1回）、『乳房再建』（第2回）、『絶対音感』（第4回）、『まぐろ土佐船』（第7回）、『ネグレクト』（第11回）など、このジャンルでは異例のベストセラーとなっていることからも、当賞がノンフィクションの新しい地平を拓き、新しい才能を発掘するものであることを示していると自負しております。募集作品は未発表作品に限り、海外冒険旅行や、博物誌、観察記、歴史発掘、ビジネスドキュメント、スポーツドキュメント、科学ドキュメントなど、さまざまな視点から「時代」を捉えたものを、国内外を問わず広く世界から求めます。原稿枚数は、400字詰め原稿用紙200～300枚程度で、応募資格は、プロ、アマ、性別、国籍、年齢は問いません。